

第二十四話 自由人の誇り

先日は「自由」という問題について半分しかお話しませんでしたので、きょうは残りの半分についてお話しすることにいたしました。先日も申しましたように、自由とは、なにをしていいのかわからなくしかもなんでもできるという無意味な状態ではなくて、自分が今、なにをしなればならぬかを正しくわきまえた上で、しかもそれをするためにものからも束縛を受けないでいるという状態なのです。

そして、人間が、人間としてなにをせねばならぬかということは、結局、人間存在の目的に直接に結びついていることなのです。従って人間が行き着かねばならぬ目的に向かうその「道」にならなければならないことが「善」なのであり、それに背を向けること、すなわち、その「道」にはずれることが「悪」なのだということに「道徳」の根本があるのです。従って、また「真の自由」とは人間のなさねばならぬ善を行なうため、言いかえれば、人間がかくあらねばならない理想の姿を実現するために、なにものからも拘束されてはいないという状態を意味することにな

ります。

社会に生きる以上、人間は肉体的には常にある束縛を持っています。ちょうど、動物が檻に入られ、あるいは鎖につながれているように、人間もまた、毎日の生活のためには一定の会社の一定の席に縛りつけられているのです。あるいは、もっと大きな、もっと快適な家に住みたいと思っても、なかなか思いのままにはならないもので、粗末な裏長屋で辛抱せねばならぬかもしれません。また、病気になるれば、望むと望まないにかかわらず病院のベッドを離れることができないでしょう。肉体的自由、言葉をかえると、人間の動物としての自由には限りがあります。世の中のこと万事が、そうそうは思いのままにならないものなのです。からね。

が、それにもかかわらず、人間はもっと高い次元において、すなわち精神の高みにおいては完全に自由であり得るのです。いや、自由でなければならぬのです。肉体的な自由に対して、これは「心の自由」と呼ばれます。

いったい、自由とか平等とかの思想は、もともとキリスト教思想として生まれて来た高度の精神文化なのでありますが、人類が神を見失ってから、いつの間にか、自由とか、平等とかなどの言葉だけは残りましたが、中味はすっかり入れ変わってしまったのです。それではキリスト教思想の流れをくむ精神文化としての「心の自由」とは、どういうことなのでしょう？

すでにお話しましたように、神の啓示による人間存在の目的と、その目的に行き着くための「道」としての掟……これさえわきまをえれば、人間はだれでも、たやすく、その目的に到達できるかというところ、決してそうではありません。そこには、その道の途上にはさまざまな妨害物が、あたかも人間を一步でも神から遠ざけようとするかのように、所狭しと横たわっています。自由とは、苦しみつつ、戦いつつ、一つ、また一つと、その途上に横たわる妨害物を押しのけることによってのみ、はじめて、かち得られる貴重な宝なのであります。

その妨害物にはさまざまなものがありましようが、中でも私たちの心の自由を束縛する最も根本的な妨害物は、私たち自身の持つ動物性というものです。いつかも、人間とは複雑怪奇なもの、いわば、神の生命の分け前ともいふべき靈魂と、あくまで動物本能に生きようとする肉体と、この全く正反対な二つのものででき上がっていると申したことがありましたが、この人間の動物としての一面こそ、私たちの自由の最大の敵であると考えられるのです。

偉大な聖者、聖パウロでさえ「人間の精神に従えば、私は神の掟に従うことを喜ぶが、私のからだに、も一つの力があって、それが理性に対して戦い、からだにある罪の力のもとに私を縛りつける。ああ、私はなんと不幸な人間であることか！」と叫んでいます。

人間はだれでも、ただひとりの例外なく、物心づくしと間もなく情欲というものを感じます。情欲とは理性と官能との争いを意味します。聖パウロが同じロマ書の中で「私は自分で望む善をせず、むしろ望まない悪をしている。」と言っているのはそのことです。してはいけないと言われるとなおさらしたくなる。見てはいけない、触れてはいけないとわかると、よけいに見たくなり、触れなくなるもの、そういう情欲が人間にはあるのです。ですから、理性がはっきりと真理に目覚め、人間のあらねばならぬ高い姿をしつかりと凝視すればするほど下等な官能との戦いは、より深刻になるでしょうね。だが、なんとかしてその官能の力に打ち勝たない限り、人間は真の意味での自由を味わうことはできないのです。

卑近な例をとってみましよう。給料日に、なんとなく気が大きくなって、友人と一緒にお酒を飲みに行ったとしましょう。しかしある一定の時間が来ると、理性は「もう今夜はこれ以上、飲んではいけない。」と、限度の来たことを教えます。ところで、あなただったらそんな時、どうなさいますか？

「うん、わかっているよ。だが、もう少し……もう少しだけ。」と、そのふんい気に未練が募って、どうしても手から杯を放すことができてなくて——たいへん失礼な言い方になりますが——そのまま飲み続けて、よっぱらって、醜い姿をさらけ出されたら、まあ仮定しましょうか。その

です。自分でやってみたくてむずむずしながら、社会の制裁とか家庭のトラブルなどが恐ろしくてかろうじて耐えている背徳行為を、ある作家が勇敢に文学という衣を着せて書き立ててくれたので、せめて、それを読むことによって、そして、そこに共感を感じることによって自ら慰めようということ、「美徳のよろめき」だとか「挽歌」などという、いわゆる、一連の姦通文学が、日本のベストセラーズになったという、その意味の深さを、私はしみじみと恐ろしいものと思うのです。人間存在の終局の目的に向かうところの道に連なるものとしての「善」と「悪」とのけじめのないところに、真の道徳というものはあり得ませんし、道徳の確立されぬところに、人間の真の自由の喜びも、また、あり得るはずがありません。

さきほどのお酒の話にもどしましょう。もしも、あなたが、限度の来たことを告げる理性の聲に、もっと飲みたいという未練を絶ち切り、きっぱりと杯を置いて友と連れ立ってそこを立ち去られたのであったなら、あなたははっきりあなた自身の主人であり、もっとその安逸な情緒に浸っていたという情欲の束縛の鎖をきっぱりと絶ち切って、あなたははっきり自由人であったのです。たまさかの俸給日に、その中のわずかのお金を投じて、なかの良い友人と美酒を飲み交わして友情を温め得た……それはそれでよいことでした。良心の呵責のない、ほのぼのとした喜びを互いに分けあって、その友と別れたあなたは、ほんの少しばかり軽くなった俸給袋を持って、

時、あなたは官能に負けたのです。つまり、あなたは「だれからも強制されたのではない、おれが自由に飲んだんだ。」とおっしゃるでしょうが、実は、あなたは——ほんとうのところは——よい加減をやめておきたかった、だが、あなたの官能が……あなたの動物性が、あなたの心を縛りつけ自由を奪って、あなたに酒を飲ませたのです。あなたは決して自由ではなかった。あなたは、あなたの官能のまじめな奴隷にすぎなかったのです。酔いがさめて、あなたは、そこはかとない後悔をお感じになることでしょう。そして、お酒のために多額の金を払った後の残り少ない月給袋の軽さに気づかれるなら、また、淋しくあなたの帰りを待ち侘びる奥様の顔を思い出さなければならぬなら、良心のとがめはひとしおでしょうね。

さらに、もう少し深刻な例をとらせていただければならぬ、お互いに結婚の相手としては考えられない男女の交際で、それがいけないことだと、心の片隅で感じながら、ついに越えてはならない垣をふみ越えて、不倫な愛欲の味を知り、その後で互いに悩み、そして、ついには互いに惜しみながら、心に痛手を負うて去って行くという人間の心の悲劇……その愚かさは、自分たちが自由にふるまったのだと信じながら、その実、醜い肉欲の暴力に振りまわされたまじめな奴隷であったのだというおのが姿に気づかぬところにあるようです。

それにつけても、考えさせられることは「道徳」というものの対する現代人の無知ということ

愛する妻の待つわが家に急がれるでしょう。少しきげんのよくなったあなたは、その俸給袋を奥様に手渡ししながら、友人と一杯飲んで来たよ、と朗らかに告げられるでしょう。あなたの朗らかさが奥様にも伝染して少しばかり中味の減った俸給袋ですが、奥様は黙ってにこにことおえみながら、それを受け取られるでしょう。

小さなことですが、あなたが正しくあるために一つの小さな妨害物の束縛を脱したという、その心の自由が、その自由人の誇りが、あなたの家庭を明るくしてくれるのですね。と申しましても、私は、月給日には、俸給袋に手もつけないで封をしたまま、そっくり奥様に手渡されるよい習慣をお持ちになるりっぱなだんな様方に悪い知恵をつけるつもりは毛頭ありませんから、その点誤解をなさらないよう、お願いします。

皆様、生きるこの世の生命は、ますます苦しく、ますますせちがらくなって行くようです。けれども、もしも、私たちの日々の生活のための多忙な働きを繰り返しながら、それを守銭奴のような富への執着に心捉われてするのでなく、また、他人を押しつけて出世しようという野望をそのかす情熱に束縛されてするのもなく、ただ、この世の毎日毎日の小さな生命の営みで、一歩ずつ、私たちの永遠の目的に近づきつつあるのだという喜びと希望に胸ふくらませながら、そ

の日その日の仕事を神に捧げて、自由人としての、喜びと誇りに生きる生命があるとするなら、私たちは、それをこそ「自由」と呼ぶことをちゅうちょしないでしょね。

そうです。それが「心の自由」というもののなのです。

肉体の自由を束縛されて、望むと望まないにかかわらず、一定の生活形式の中に押し込められたような日々を生きながらも、せめて、人間精神の高みにおいて、私たちは存分に、心の自由の喜びを謳歌したいものですね。

どうやら、あわただしい師走の夜が、ひえびえと、みちのくを包み始めたようです。おからだに気をつけてください。

では今宵はこれで、皆様、さようなら。